



aaca
2025.01

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

no.

100

目次

- ・創刊100号にあたって ————— 1
東條隆郎 (会長)
- ・空間とアート: 人類の平和な広場へ ————— 2-3
絹谷幸二 (画家: 名誉会員)
- ・OPINIONS: 共鳴 [6]
かなうはよし、かないたがるはあしし ————— 4-5
熊倉功夫 (MIHO MUSEUM 館長、国立民族博物館 名誉教授)
- ・アートと文化と環境と [3]
テキスタイルの潜在力—丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
での須藤玲子の作例をとおして ————— 6-7
高橋瑞木 (Centre for Heritage, Arts and Textile 館長)
- ・素材を知る [3] ブロンズ (鑄造)
鑄造技術—ブロンズの生命力に魅せられて ————— 8-9
池田嘉文 (彫刻家、鑄造家: 個人会員)
- ・AACA賞2024 (第34回) ————— 10
[表彰委員会] 可児才介 (委員長)
- ・2024年度 第36回設立記念総会・
AACA賞2024表彰式 ————— 11
[総務委員会] 小谷純造 (委員長)
- ・第206回aacaフォーラム:
「まちライブラリー」の取り組みと、その一例
「MUFG PARK / LIBRARY」 ————— 12
[フォーラム委員会] 萩尾昌則 (委員長)
- ・第207回aacaフォーラム: 地域力を集めた市民芸術祭
「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」の取り組み ————— 13
[フォーラム委員会] 萩尾昌則 (委員長)
- ・第18回aaca建物視察会2024 —
新潟・新発田・糸魚川・上越地区 ————— 14-15
[会員交流委員会] 櫻井ちるど (建築画報: 法人会員)
- ・第14回aacaサロン: 漆に魅かれて ————— 16
[会員増強委員会] 山極裕史 (委員)
- ・建築美術工芸・よもやま話 [3]
AACA賞って? ————— 17
会員H & 会員K & 会員T
- ・私が思うaaca的空間 ————— 18
◎宮越家離れ・庭園
長谷川亨 (建築家: 個人会員)
◎佐川美術館・樂吉左衛門館 茶室
山崎輝子 (皮革工芸家: 個人会員)
- ・創刊にあたって (『aaca』創刊号より) ————— 19
芦原義信 (初代会長)

憲章

日本建築美術工芸協会は、故芦原義信氏が求めた文化的都市の創造を实践する為に、
建築・美術・工芸に関わるあらゆる分野の人々が集まり、連携し、
交流し文化と芸術性の追及と情報の発信を行い
健康で文化的な空間創造に寄与する。

1. 優れた文化的な都市環境の創造を追求する。
2. 地域の環境と文化を尊重しさらに創造を求めろ。
3. 芸術文化の重要な担い手として社会の発展に努める。
4. 建築・美術・工芸が一体となった総合的な芸術空間を創るよう努める。
5. 文化的な空間創造のための「1パーセント運動」を提唱する。

創刊100号にあたって

東條隆郎 日本建築美術工芸協会 会長



日本建築美術工芸協会（以下、aaca）の会報『aaca』は、本号で創刊100号を迎えました。1989年に創刊して以来、36年にわたり協会の刊行物の柱ともいえる媒体として、協会内外の方々に「憲章・理念」やこの「憲章・理念」に基づいた取り組みや活動を伝えてきました。

創刊号では、建築界に感銘を与えた建築作品を設計した建築家を顕彰する「村野藤吾賞」、建築および建築関連美術の表彰する「吉田五十八賞」それぞれの対象となった「東京サレジオ学園」の建築とその関連美術のみを紹介しています。その内容から、「東京サレジオ学園」が協会の「理念」を体現したものの一つであり、協会の目指すところとして取り上げていることが分かります。

創刊号：<http://www.aacajp.com/about/pdf/newsletter/No01.pdf>

※創刊号に掲載された、初代会長・芦原義信氏の文章「創刊にあたって」を本誌P19に掲載。

設立当初のころの好調な日本経済とその後の長い低迷期を経て、現在、建築や都市景観は大きく変わりつつあります。さらには様々な技術、AIなどが登場し社会はかなりのスピードで変化を続けています。当時と現在とでは隔世の感がありますが、現在でも、建築に関わる美術、工芸、並びにその創造を支える人々が連帯し「美しくゆとりある環境の街づくりを！」目指すという、この協会の理念は変わることはありません。

2001年に制定された「文化芸術基本法」前文では、「文化芸術は人々の創造性を育みその表現力を高めるとともに、人々のつながりや相互理解、多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するものであり、世界の平和に寄与するものである」と、文化芸術を定義しています。様々な文化芸術の分野の中でも「建築・都市」はとて身近な「心豊かな社会を形成する」存在であり、創造された「建築・都市」空間は長い期間存在し続けるものでもあります。つまり、その環境の持つ豊かさや内蔵する多様な可能性・能力は、人々に対し様々な形で大きな影響力のある存在なのです。

私たちaacaの建築家・美術家・工芸家・ランドスケープアーキテクトやこれらの方々の活動を支える方々はともに力を合わせ、様々な「建築・都市」空間において「より豊かで多様な文化芸術的価値を創造し広く社会に発信」していくことが、私たちaacaの役割であると思います。

現在aacaでは、公共の施設を新たに建設する場合に、総費用の何パーセントかを芸術的環境づくりに充てる、「パーセントフォーアート」の運動を推進しています。対象となる公共の

場には、多くの人々が目的を持つ/持たないにかかわることなく訪れます。そのように芸術的環境に自然に触れることができることがとても大切なことなのです。そして、年齢の若い時から芸術的環境に触れること・体験することは、より豊かな人間性を育むことにもつながっていくものと思います。

群馬県では2022年に「群馬パーセントフォーアート」推進条例を制定し、群馬モデルとして、具体的に県予算の中の投資的経費の0.1%をアート振興に振り向ける施策を始めました。他の数多くの自治体においても、国の「文化芸術推進基本計画」に準じた「文化推進振興条例」「文化芸術振興条例」などを制定し、文化芸術に対する施策を位置づけています。これらの施策が「パーセントフォーアート」の条例化につながっていくためにも、aacaでは「パーセントフォーアート」の取り組みを鋭意進めていきたいと考えています。すでにフランス・イタリア、アメリカ・台湾・韓国などでは「パーセントフォーアート」の施策が進められています。韓国ではさらに進んで「芸術家の地位と権利の保障に関する法律」として「芸術家福祉法」や「美術振興法」が制定され、さらに芸術家の契約を支援する「標準契約書」の整備なども取り進められています。日本においても「パーセントフォーアート」の取り組みを進めることはアーティスト支援にもつながり、ひいてはaacaが目指す「美しくゆとりある環境の街」を創造し社会に発信することにもつながっていくものと考えています。

「発信」と共にaacaのもう一つの大きな柱は「交流」です。aacaには建築家・美術家・工芸家・ランドスケープアーキテクトや、その活動を支える方など、「空間創造」にかかわる多くの多才な個人・法人の方々が参加されています。aaca内の「交流」のみならず外部とも「交流」することで生み出される無形の価値を、それぞれの立場でさらに育て、新たな価値を生み出していくことにつながっていく、このような流れができることを期待しています。

現在aacaでは各委員会が、AACAA賞、BOX展、aacaフォーラム、aacaサロン、建物視察会、地域創生講演会など様々な企画・事業を進めています。多くの会員の方々が委員会活動や事業企画に参加され、「交流」を深めていただくことを願っています。

2024年12月、aacaは36回目となる設立記念総会を執り行いました。多くの会員の方々に支えられて現在のaacaがあります。これからも会員の皆様とともに「より豊かで多様な文化芸術的価値を創造し広く社会に発信すること」、そして「交流」をテーマに活動を続けていきたいと思っています。

空間とアート：人類の平和な広場へ

絹谷幸二 洋画家、aaca名誉会員

戦争中、1943（昭和18）年1月24日、奈良に生まれた私は、まさに幸いにも爆撃には遭わず、京都・金沢・鎌倉と同様焼け野原の身の危険にさらされることも無かった。これはパリも同様。ベトナム戦のサイゴンも同じであったという。つまり、絵画や芸術のある所、東京でも上野の東京国立博物館や東京藝術大学、皇居等は戦火から逃れているのである。なぜか。芸術のある所を戦火にまみれさせては、人間としての立ち位置がなくなるからだ。あえて雑居する町を根絶やしに焼いてしまおうのだろう。

絵画芸術、建築空間、美の在る所は犯し難い。人類の平和の広場であるのだ。私たちはそのことを良く理解し、芸術その他の文化空間を人類の何物にも代えがたい平和で楽しい場に創造していかなければならないのだ。



絹谷幸二（きぬたにこうじ）

東京藝術大学大学院壁画科でアフレスコ（壁画の古典技法）と出会い、1971年のイタリア留学によってアフレスコをさらに深める。帰国後、イタリアで学んだアフレスコに日本画の画材を取り入れ、独自のスタイルを確立。美術と社会を結びつける幅広い活動や次代を担う若者たちに創造の喜び、楽しさを伝える活動も行い、40年以上にわたり日本の美術界をリードしている。日本藝術院会員。2014年文化功労者顕彰。2015年日本放送協会放送文化賞受賞。2021年文化勲章受章。

aacaでは設立時からの会員で理事も務め、2022年に名誉会員に推挙された。

作品

会報『aaca』創刊100号を記念し、名誉会員の絹谷幸二氏から、上記のメッセージをいただきました。豊穡なるイメージと色彩で、森羅万象をモチーフに展開される絹谷ワールドの根底にあるのは「美術は核よりも力を持つ」という強い信念です。ここでは、平和をテーマに描かれた作品をご紹介します。

※掲載した作品は、「絹谷幸二 天空美術館」（大阪市）で開催中の企画展「絹谷幸二 平和へ」において、ご覧いただけます。

◎「ニューヨークの天使」1998年



鳥かごのような木偶（でく）の胴体、そして溢れる涙と平和を訴えかける顔。大空に羽ばたこうとする翼には核弾頭をイメージするようなミサイルが挟まれている。ニューヨークの個展に際し、現代社会の不安と警鐘を込め、世界の平和への祈りを天使に託すという願いで造られた。1988年以降制作されたスチロフォームを着色した彫刻（立体絵画）の中で、絹谷スタイルをとりわけ強く印象づけた代表作。人間の悲しみや苦しみを越えたところにある「希望」や「信頼感」、背面の大輪の花は、再び抱く「夢」を象徴している。

◎「愛の結晶」2023年



「愛」をくちずさみ、「愛」を象徴するかのように抱き合う夫婦と子どもたち。その背景には戦闘機の不穏な姿が。生命の営みも平和が必須であることを教えるもので、人類共通の普遍的な真理「平和」への祈りが込められている。

◎「激痛の極み 平和よ来たれ」2024年



太古の生命を象徴するかのように様々な物体が集合した古代彫刻。その身には無数の釘が打ち込まれ、破壊と傲慢に明け暮れた人間の愚行と、歴史や宗教、多様な価値観などを踏みにじる戦争の不条理さを暗示している。背後に、輪投げのように長い竿で戦闘機を落とそうとする少年と、口を開けて加勢する剥製化したワニが描かれ、反戦への強いメッセージが読み取れる。戦争は決して他人事と考えてはならず、一人の人間として「激痛」を感じて初めて平和の尊さに気付くものであると説く。

◎「うずもれしは砂の愛Ⅱ」2023年



薄い板切れで囲まれた方形の枠内には永久不変は無いと諭すように「いろは歌」が敷き詰められ、その中に砂で形造られた今にも崩れゆきそうな抱き合う群像が浮かび上がっている。背景に描かれた赤土色の地平線の彼方には戦禍を示す暗雲がたなびき、画面下段の砂の間にウクライナ国旗が覗いている。形あるものはいずれくち行くという「無常観」を根底に、世の安寧と生命の安らぎを祈念して描かれた作品。

◎「発火激情(平和を祈る自画像)」2010年



2001年9月11日の世界中に衝撃を与えたニューヨーク同時多発テロ。一瞬に日常生活が破壊され、多くの人命が失われた悲劇で、たとえ宗教や政治など異なる価値観や原因があったとしても決して許されることはない暴挙、絶対悪である。

本作は繰り返される人類の愚行へ警鐘を込め、全身全霊をかけて怒りを表出した作品。激烈なまでの憤怒の表情は、翻って平和への祈りの強さを示すものといえるだろう。その眼差しはいかなる未来を見つめるのか。鑑賞者一人一人に審判を問いかけているかのようである。

かなうはよし、かないたがるはあしし

熊倉功夫 MIHO MUSEUM (ミホミュージアム) 館長、国立民族学博物館 名誉教授

かつて東京オリンピックの開催が決定される会議の折、「おもてなし」という日本語が披露され話題になった。その時、日本のおもてなしの例として、マスコミで流された映像は、例えば新幹線の車内の清掃がいかにか敏速で徹底しているか、というようなサービスのすばらしさに注目するものが多かった。しかし日本のおもてなしとは、一方的なサービスとは全く異質なもので、相互にもてなし合う、いわば共鳴するところに特質がある。その心の動きを、茶の湯では「かなう」と表現した。

17世紀の末に執筆された『南方録』の中に千利休の言葉として「かなうはよし、かないたがるはあしし」という茶の湯の心得が記されている。茶の湯は茶会を開く亭主と招かれる客との共同作業といえる。亭主は茶の湯の趣向を工夫し、誠意を尽くして客をもてなす。客は亭主の心を理解し、そのおもてなしにこたえる。互いに心を通わせることで互いの心が満たされる。それが「かなう」ということであろう。言わず語らずのうちに、互いに相手をもてなしているのである。

もてなしの心を湯木貞一(1901-97)が語っている。湯木は日本料理の近代化に偉大な功績を残した天才料理人であるが、その料理は茶の湯から学ぶところが大きかったという。映画「日本料理ともてなしの心 湯木貞一の世界」(1996年、岩波映画製作所)の中での湯木の語りを文字におこしてみよう。話しは、亭主の茶人(浜本宗俊)が湯木を迎えての挨拶からはじまる。

「ええとき、きてくれはった」。こっちはまた「ええとき来たもんだすな」

「いやあそない言うて来てくれはっても、お口に合うかしらん、ご馳走食べてほしい」。いっばいよばれて、ほんで、何や、帰り道。「帰ります」言うて、ほなら手洗いに入っている間に、霰雪がバァーッと、雪がふって来た。ほなら、玄関につつてある旅笠をはずして、私が手洗いにいっている間にはずして、四ツ目垣にそれを掛けた。風情はそこにありますねん。そこで、私は手洗い使うて、ほして、あの出て、そして、靴はいて、玄関まで二間も無いんです。入り口から玄関まで。その垣根に旅笠が掛けられて、パラパラと雪がこう霰雪がふり、「はあ、雪がふってきたな」と、その気がこれ、風流というか、茶というか。本当に、ああ雪がふって来たなあ、雪の道を、まあ、ほんまは笠ささんけど、笠さして行く風情をうました茶、茶の道です。お茶があればこそ、何もそんな下駄歩かれしません。ただ風流の道

ですわ。日本の茶の道の一つの演出です。

こう語るうちに湯木の眼は輝き、顔に紅がさし、あの優美な長い指が舞い、机をたたく。

この湯木のかたりには若干の解説が必要であろう。4時間にも及ぶ茶会は無事に終わり客は座を立てて帰途につこうとしていた。湯木はその前に用を足そうとして手洗いに行った。手洗いは母屋と別棟だったようだ。湯木が用を足していると急に天候が変わって霰(あられ)まじりの雨が降りだした。霰が「バァーッ」と手洗いの屋根を打つのを聞きながら湯木は、それを面白いと思ったのであろう。京都ではよく初冬の天気の時雨(しぐれ)とすることがある。薄日がさしているかと思うと急に雲が厚くなって雨が降り出す。霰になることもある。それが少しすると止んで、また薄日がさしてくる。その陽光に照らされて木枝に残った紅葉がキラキラ光る。まことに美しい風情である。湯木もそんな景色を脳裏に描いたのであるまいか。

手洗いを出て母屋の玄関に向かおうとした湯木の目に入ったのは垣根に掛けられた露地笠であった。茶の湯の露地では柄のついた傘は使わない。露地笠という幅広の旅笠を使うのだが、さっきまでなかった笠を、霰が降り出したとたん垣に掛けた亭主の手際がみごとだったのである。突然の時雨を、笠を出してわびの風情を演出した亭主の心が「風流の道」と湯木をして感嘆せしめたのである。また感嘆する湯木をみて亭主は心の底から嬉しかったに違いない。互いに心が合った瞬間であった。

ここには深く日本の「間の文化」がかかっている。間の文化には、時、処、位の文化で、時間的な間と空間的な間、さらに相互の立ち位置から生まれる位の間の3つの面がある。霰が降り出し、間髪入れずに笠を出したタイミングは時間的な間にはまったみごとさである。手洗いを出た折にそっと掛けられている笠は、決して押付けがましく差し出されたものではない。目に入るか入らないかの距離をおいて掛けられている。風流を解さない客であれば、笠が掛かっていることを見逃してしまうかもしれない。これは空間的な間である。一番大切なことは亭主と客という位の間である。亭主という立場にあればこそ笠が出せる。それほど歩く距離でもない。時雨であるからすぐ止むことがわかっている。だから笠をださなくとも亭主の失態ではない。実用的な意味で湯木は亭主の親切に感動したのではなく、笠を出すことで雪道を帰るわび人の風情を演出したところに感動したのであろう。これは亭主と客という位の違いがあればこそ表現できる心である。これが『南方録』の

「かなう」ということである。

『南方録』はそれに続けて「かないたがるはあしし」という。得道の客と亭主であれば、自然とところよくことが進むのだが、未熟なものがお互いになおおうとすると、とんでもない過ちをお互いにおかすことになる、と警告する。先の亭主と客の湯木は、まさに得道の人であった。そうであればこそ、露地笠一つの扱いで、一生心に残る風情を感じることができたのである。しかし、一つ間違えて迎合しようとするれば、せっかくのもてなしが破綻する。むしろ世間一般の場合ではほとんどが破綻する。かなうということは、なかなかあるものではない。

最近のアスリートは、オリンピックなどに出場する際の感想を聞かれて「楽しんで来ます」と答える例をしばしば耳にする。一昔であれば「ガンバってきます」と答えたものではなからうか。楽しんで来ますという言葉をはじめてきた時は、いささか違和感をもったが、最近はそれでよいのだと、私自身考えを変えた。ガンバリますと、無理に合わせようとするれば、「かないたがる」ことになるからである。

千利休の孫に千宗旦(1578-1658)という茶人がいた。この宗旦の息子たちがそれぞれ茶の家をたてて、表千家、裏千家、武者小路千家という、いわゆる三千家の茶が生まれた。宗旦は三千家の祖ともいべき茶人である。宗旦はどこへも仕官(就職)しなかった。したがって収入もなく貧乏人であったが、彼が作る竹の花入は非常に人気があって、その噂が上聞に達し、時の皇后である東福門院から注文がきたほどであった。

宗旦は各方面からくる花入の依頼に応じるのに忙しかった。竹屋から花入にするのに適当な太さの長い竹が何本も送られてきて、宗旦の花入作りが始まる。竹のどこを切るか、花入れの窓の部分はどこにあけるか、釘穴はどこにつけるか、墨打ちといって作者が墨で印をつけてその位置を決める。墨打ちを手伝っていた息子の江岑宗左(表千家の四代)がみていると、あまりにも無造作に宗旦が墨を打つので、思わず「竹にはいろいろな表情がありますから、もう少し竹の景色を考えて墨を打つたらいかがでしょう」といった。すると宗旦は「そういうお前に花入を頼んでくる人はいないだろう。私は賞められようと思って竹の花入を作っているのではない。楽しみで作っているのだ。」と答えた。(『覚々斎覚書』)。この心境はすばらしい。これはアスリートが「楽しんで来ます」という心境に共通するところがあるように思う。

われわれは何か一つ仕事をすれば賞めてほしいと思う。賞

められたいというのはたしかに大切なモチベーションである。しかし賞められたいとばかり思っても結果はそれについてこない。思いは破綻する。それが「かないたがる」ということである。今や世の中は、賞められたい、人に認められたい、という欲望で充満している。過度の承認欲求が犯罪行動にまで人を走らせる事例は日常茶飯事となった。ちょっとこのあたりで「かないたがる」ことにストップをかける必要がありはしないか。

アスリートは日頃、血を吐くような練習を重ねてきているから「楽しんで来ます」と自信をもって胸を張って答えられよう。しかしわれわれ平凡な人間はそんな自信はない。だから人に認められようと思って、かないたがる。

最近私は、自分という存在がからっぽである、と思うようになった。私にはそもそも人に認めてもらうような中身など何もない。そのつど、そのつど、外からの刺激に反応してきただけではないか。からっぽ、すなわち空である。空より出でて空に還る、という禅語がある。生死もまた空。死んでしまえばからっぽにかえる。しかし、からっぽは悪いばかりではない。からっぽであるからこそ、異質なもので受客できるし、他者にも共鳴できる。かないたがらないから、時としてかなうこともある。それを無心といいかえてもよい。自己を主張するよりも、他者に共鳴する自己が大切であり、それは自己主張よりも相互の関係性に優位をおこうとする心のはたらきである。こうした日本人の心性は今や衰退しつつあるといえよう。しかし、互いに無心になって共鳴する文化が、茶の湯という日本独自の生活文化の中にまだよく生きていることに注意を喚起しておきたい。



熊倉 功夫(くまくらいきお)

1943年東京生まれ。東京教育大学卒業、文学博士。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長などを歴任。

2020年京都府文化賞特別功労賞、2021年京都市文化功労者受賞、2022年文化庁長官表彰。

著書に『日本料理の歴史』、『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』、『後水尾天皇』、『文化としてのマナー』、『現代語訳 南方録』、『茶の湯日和 うんちくに遊ぶ』、『日本人のこころの言葉 千利休』、熊倉功夫著作集全7巻、茶道四祖伝書等。

専門分野：日本文化史、茶道史。

テキスタイルの潜在力—丸亀市猪熊弦一郎現代美術館での須藤玲子の作例をとおして

高橋瑞木 Centre for Heritage, Arts and Textile 館長

テキスタイルはカーペットやカーテン、ソファ、クッションやベッドカバーなどに使用され、室内空間をさまざまな質感や色、模様によって装飾する役割を担われてきた。このような場合、テキスタイルは既存の空間に従属する存在とみなされ、装飾芸術、あるいはデザインとしてカテゴライズされる。近年ではレム・コールハースのパートナー、ペトラ・ブレイスによる、空間の形や印象をユニークな加工やプリントのカーテンやカーペットで変化させる仕事が印象深い。

いっぽう、1960年代に欧米で確立した「ファイバーアート」は、壁という建築構造に依存しない立体的、彫刻的な形式、つまり自立した存在になったことで、タペストリーに代表される平面的なテキスタイル芸術と一線を画すことになった。例えばポーランドを代表するアーティスト、マグダレーナ・アバカノヴィッチによる馬の毛やウールで織り上げた巨大な「アバカン」と名付けられた作品群がその代表的なものだ。この「彫刻的」というところがポイントで、「ファイバーアート」は木材や石、金属といったハードな素材が使われることが慣例だった「彫刻」というジャンルに繊維というソフトな素材による立体を参入させたことでファインアートのサブジャンルとしてみなされるようになった。もちろん、テキスタイルがファインアートに組み入れられたのは、上記だけが理由ではない。テキスタイルを実用のためでなく、自己表現の手段として織ったり、縫ったり、染めたりするアーティストが増えたのも大きな原因のひとつである。テキスタイルとファインアートの関係は現代アートの分野で今もっとも注目されている議論のひとつだが、紙面が限られているのでここでは深入りしない。

興味深いことに、須藤玲子、そして彼女が率いるNUNOは、独立した「彫刻」作品として作品を製作したことはなく、むしろ空間に対して従属的にも自立的にもなる「テキスタイルの曖昧さ」という特徴を公共空間や展示空間で提示してきた。

この曖昧さがもっとも顕著なたちで現れたのが、2023年11月から12月にかけて丸亀市猪熊弦一郎現代美術館(MIMOCA)で開催された「須藤玲子:NUNOの布ができるまで」展のために製作された《ビッグパステルドローイング》(2023年)だったように思う。本展は筆者が勤務する香港のCentre for Heritage, Arts and Textile (CHAT)で2019年の秋に開催され、その後イギリス、スイスでの巡回を経て日本に凱旋を果たした。

MIMOCAでの展示に際し、須藤は谷口吉生設計の美術館の建物と、猪熊弦一郎の両方にオマージュを捧げた新作を発表した。丸亀駅を出てすぐに現れるMIMOCA正面の広場空間(ゲートプラザと呼ばれている)の奥には、猪熊弦一郎による壁画《創造の広場》(1991年)が設置されている。この壁画の前面にある張り出し部分の天井から、須藤は幅18.9m、高さ9.6mの巨大なカーテン《ビッグパステルドローイング》を設置した(図1)。このカーテンのテキスタイルは、半透明の白いポリエステル製の布に、須藤の手描きの円の連続パターンがブロック加工であしらわれているデザインで、カーテンのサイズは巨大なものの、布自体が半透明なので、際立った存在感を示すことがない。

試行錯誤の上は無事設置されると、この巨大なカーテンは広場の中の空気の動きに反応して、波のようにゆっくりと大きく動き出した(図2)。カーテンが大きく翻ると、カーテンの後ろに



図1 須藤玲子《ビッグパステルドローイング》2023年、撮影：高橋マナミ、写真提供：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館

ある猪熊の壁画が見え隠れする。そして広場の中からカーテンを見ると、円の連続パターンがあたかも青空に描かれたドローイングのようにうかびあがる(図3)。美術館建築の一部になったカーテンは、建物に吹き付ける風の強さによって大小さまざまな有機的な振れ幅の動きを見せるので、あたかも建築が呼吸をしているかのような効果を生んだ。そして、この展示は、目に見えない風の動きをテキスタイルが可視化しながら、テキスタイルの素材独特の柔らかなふまの美しさを示すことができたのであった。本作は、周囲の環境になじみながらも、自然の力によってその存在力を現すという、裏方であり主役にもなりうるテキスタイルの空間への介入のありかたを強く印象付けるものであった。(そしてそのことは、屋外用としては常軌を逸した幅18.9m、高さ9.6mというサイズによって成し遂げられた

といえる。そう、テキスタイルは縫い合わせることでいくらかでもスケールアップが可能なのだ。)

皮肉なことに、この原稿を執筆しながら、ふとひとつのことに気がついた。建築は、通常建物の部分や機能が予測できない動きをすることを許さない。なぜならそれは事故や劣化に繋がるからだ。だから生活空間の中で、わたしたちはテキスタイルが予想もできない自然の力に反応しないように、素材の潜在能力を制御しながら使ってきたのではないか。強風に引きちぎられないかという私達の心配をよそに、谷口吉生の名建築の軒下で悠々と空気をはらませ、自由を満喫しているように見える《ビッグパステルドローイング》は、テキスタイルの潜在力を確かに見せつけていた。



図2 須藤玲子《ビッグパステルドローイング》(部分) 2023年、撮影:高橋マナミ、写真提供:丸亀市猪熊弦一郎現代美術館



図3 須藤玲子《ビッグパステルドローイング》(部分) 2023年、撮影:高橋マナミ、写真提供:丸亀市猪熊弦一郎現代美術館



高橋瑞木(たかはしみずき)

森美術館開設準備室、水戸芸術館現代美術センター学芸員を経て現職。香港のテキスタイル産業遺産と現代アート、デザイン、クラフトをつなげるアートセンターCHAT開設のため2016年に香港に移住。現職ではCHATの特別企画やコレクション、教育プログラムほか、香港および国内外の美術館との連携事業の指揮を執る。

これまでの主な国内外の企画として、水戸芸術館現代美術センターでは「Beuys in Japan: ボイスがいた8日間」(2009)、「クワイエット・アテンションズ 彼女からの出発」(2011)、「高嶺格のクールジャパン」(2012)、CHATでは「Unfolding: Fabric of Our Life」(2019)、「Sudō Reiko: Making NUNO Textiles」(2019)、「Yee I-Lann: Until We Hug Again」(2021)、「Jakkai Siributr: Everybody Wanna be Happy」などの展覧会を手掛ける。

鑄造技術～ブロンズの生命力に魅せられて

池田嘉文 彫刻家、鑄造家[個人会員]



はじめに

美術品、工芸品、装飾品などの材質として使われている素材の一つブロンズは、銅を主体に錫(すず)などを混ぜた合金のことです。

ブロンズ製のものとしては、銅像や胸像の他にも、モニュメント、トロフィー、メダルなどがあります(一般的に銅像と言われるものも、純度100%の銅の像はあり得ない為、実はブロンズ合金像です)。誰しもが知っている銅像といえば、高さ15mある奈良東大寺の大仏だと思えます。

ブロンズの作品・製品は「鑄造」という技術で作られていますが、なじみのない世界だと思います。少しでもこの文章からわかって頂けると幸いです。

ブロンズの歴史

ブロンズは紀元前3,000年頃、現在のイラク南部地方に起こった、初期のメソポタミア文明であるシュメール文明で発明されたと言われてます。

日本には紀元前3世紀頃にブロンズ製の鏡や剣などが朝鮮半島を経由して九州へ伝わり、全国へと広まりました。弥生時代中期、紀元前100年頃になると国内での生産が開始。瀬戸内、畿内などにおいて金属加工業として鑄造を営むようになり、ブロンズ鑄造の知識や技術が日本に定着しました。

関東では中世末期、現在の川口市において鑄物の製造が盛んに行われるようになりました。川口市は江戸、東京に近く鑄物製品の需要があったこと、荒川、芝川から産出する良質の材料の砂や粘土が鑄型作りに有利で運搬にも恵まれていたことなどの理由により、川口市から各地に普及しました。

ブロンズ鑄造の材料

鑄造で加工される原材料には鉄、アルミ合金、銅、真鍮などがありますが、ブロンズ作品の場合は銅を主成分にした合金、一般的に銅85%、錫5%、亜鉛5%、鉛5%でつくられます。添加する錫の量が少なければ10円玉に見られるような赤銅色、亜鉛が多くなると黄金色になるなど、割合を変えることで発色を変えることも可能です。

ブロンズは銅に比べ、研磨や彫刻などの加工ができる柔らかさも兼ね備えていることから、美術品には適した素材として親しまれています。

鑄造の種類・変遷

鑄造とは、高温で熱した液体状の金属を鑄型(作りたい形と同じ形の空洞を持つ型枠)に流し込み、それを冷やして目的の形状に固めるを言います。

鑄造の種類は、作るものによって工業鑄造と美術鑄造に分けられます。工業鑄造ではマンホール、工業部品、鉄部品などを大量生産します。一方、私が携わっている美術鑄造は、主に一品生産が多く、大きさや形状の自由度が高く、鑄造法を選ぶ事で複雑な形でも可能になります。彫刻作品の他、仏像や仏具、ジュエリーやアクセサリなどが作られます。

日本の鑄造界、特に美術鑄造界に大きな影響を与えたのは、1950年代にジャコモ・マンゾーやマリノ・マリニなどによるイタリア現代彫刻が日本に紹介され始め、その後日本に導入されたイタリア式蠟型鑄造法です。

それまでの日本の美術鑄造の主流は込型鑄造で、原型から分割して写し取った外型(雌型)に、流れ込む金属の厚みだけ小さな中子(中型)を作り、外型に中子を納めて鑄型を組み立て、外型と中子との厚さ数ミリの空間部分に熔湯(ようと)：高熱にして溶解し液体状になった金属を流し込む、というものでした。

イタリア式蠟型鑄造法は、原形をルネサンス期に起源を持つ蜜蠟(みつろう)でつくり、それを石膏に埋め込み、蠟を溶かして鑄型を製作します。日本古来の蜜蠟を使った鑄造に似ています。原形は鑄型を作る過程で無くなってしまいますが、柔軟かつ展延性に富んでいる蠟を使うことで、従来の鑄造方法では表現しきれなかった、動きやタッチ、ニュアンスを現すことができ、蠟の状態ですらに手を加えることもでき、作品の表現方法の可能性を広げることに一役を買いました。

鑄造作業の流れ

浮世絵は絵師、彫り師、配色、摺師(すりし)など何人もの職人が携わり分業体制で作られることで知られていますが、ブロンズ作品の制作も似たところがあります。ブロンズ作品を制作する際には、原型師(彫刻家、デザイナー)が原型を作り、鑄造職人がそれをブロンズで形を作ります。次に仕上げ職人が、金属加工の仕上げとして熔湯を流した湯道を切ったり、ダメ



左:石膏鑄型、中:湯道を切る前の作品、右:完成品

ジのある所を直します。そして着色を施し完成品になります。浮世絵もブロンズ作品のどちらも長い行程の作業の末に完成するのです。

鑄造の技法、鑄型

鑄造の種類・変遷の章でも述べましたが、改めて、鑄造の技法や鑄型について説明します。

鑄造ではまず、鑄造する形に合った鑄造法を考えて溶かしたブロンズを流す鑄型を作ります。

次にブロンズの材料をコークス石炭、高温ガス、動力を使った電気炉などを使って、融点より高い1,000℃から1,200℃の高温で溶かし液体(溶湯)にします。溶解炉は、コークス石炭、高温ガス、電気など、熱源の違うものを使い分けています。溶湯の状態を見極めるのは職人の技ともいえるものです。融点の1,000℃近くになるとブロンズの表面は崩れだし液体になり始め独特なオレンジ色の輝きを放ちます。溶けたブロンズの表面は鏡のように回りが写るかのような美しさになります。

この水のような流動性のあるブロンズを鑄型に流し込むと、鑄型の中の隅々まで流れ込みます。そして、冷やして常温にして凝固したところで型を壊すと、中から目的のブロンズ作品が出て来るのです。

ただ、金属が溶解する際には不純物が燃え出すため、作業場が膨大な煙に包まれます。また、溶湯は水のように書きましたが、1,200℃という常識を超える高温ですので、大変慎重に取り扱う必要があります。



慎重に行われる1,200℃の液体になったブロンズの流し込み(櫻井美術鑄造)

ブロンズを流し込む鑄型としては、蠟、ワックスに原型を置き換え耐火煉瓦に石膏を混ぜて固めて型を作り500℃位で焼

成して脱蠟し、蠟の無くなったその隙間にブロンズを流す「石膏型」、川砂に粘土質を混ぜた材料で型を作る「生砂型」、海砂にケイ酸ナトリウムを混ぜ炭酸ガスで固めて型を作る「ガス型」などが有名です。

ブロンズ鑄造においては、製造過程の急激な温度差(1,200℃から常温)により激しく収縮が起こり、完成品は1,000分の10ほど縮むと言われます。この縮みも加味して鑄型は作られています。

課題

この数年、鑄造工場での大きな課題の一つは人材不足です。そのため技術の継承が困難になり、それは生産能力・品質の低下にも繋がり、喫緊の課題となっています。排煙能力の向上、廃棄物の再利用など、環境に関する課題も多々ありますが、これらは技術の力で解決しつつあるのが現状です。

最後に

私はブロンズという素材を「生きてる素材」と伝えています。それは、10年後、100年後、1,000年後以上まで生き延びていける耐久性を持ち、その長い月日の中、にブロンズ自身がその土地の風土、空気、環境、気温を感じとり、銅が科学反応を起こして錆を出したり、濃い色に姿を変えて環境に馴染もうとするからです。経年変化で輝きを失ったブロンズ像でも軽く拭いてあげると、キラキラと金属の輝きを放ち生き返り応えてくれる姿にも、ブロンズの生命を感じます。



そして鑄造は、金属加工の中でも最も歴史のある基礎的な加工技術です。地球に太古から存在する自然界の素材を相手に、人の持つ技や感性で行い続けて来ました。

人類がこの地球上にいる限り大切な技術として終わりの無い仕事として、これからも残していきたいと思えます。

AACA賞2024(第34回)

表彰委員会

さる11月13日に「AACA賞2024」の公開最終審査が行われました。今年、コロナ禍の時期を除くと、例年より応募数が多く、また力作ぞろいであったため選考委員は全員頭を抱え悩みながら、つらい思いを再び体験することになってしまいました。第一次審査では61の応募作品を18に絞るという厳しい仕事でした。少数の票差で関門を通過できなかった優れた作品がかなり多く見られたのも今年の特徴です。選考委員にとって、自分の推す作品が消えていくという、やるせない思いの連続だったように思います。現地審査では例年のように手分けをして2~3人のチームで作品を訪れ、作者の直接の言葉で説明を受けました。提出パネルで理解した内容だけでは分らなかった大量の情報を、直接現地で作品を体験することで得ることができました。最終の審査会では現地に行けなかった委員にもその詳細が伝わり議論が盛り上がります。今年是最終審査に進んだ作品数が多かったため、時間が限られてしまい必ずしも十分な議論が尽くされたとは言えない状況ではありましたが、最後には委員全員が納得する形で受賞作

品が決定しました。

振り返ってみると、残念ながら最後まで残らなかった作品の中には、他の建築関連の賞であれば必ず上位に食い込めるものがいくつも見られました。そこに、このAACA賞の特徴が現れているようです。要項にもある通り、賞の創始者である芦原義信先生が謳われた「建築、美術、工芸をはじめとする様々な分野を網羅した賞」です。選考委員にも建築家に加えて、彫刻家、ランドスケープアーキテクト、照明デザイナー、家具デザイナー、キュレーター、ロボットデザイナーと言った多彩な面々が連なります。当然建築関連の賞とは選考のための視点立脚点は大きく異なり、多様なものとなっています。来年も、賞のこの特徴をご理解いただき是非さらに多くの作品を応募していただきたいと思ひます。

なお、これらの受賞作品の詳細情報や審査講評はaacaのホームページに掲載されています。また3月には協会誌の特別号としてAACA賞受賞作品紹介誌を発行しますので是非ご覧ください。

(委員長 可見才介)



公開審査風景



公開審査風景



プレゼンテーション風景



AACA賞「ボラ青山ビルディング/土浦亀城邸
復原・移築」 撮影:Tomoyuki Kusunose



芦原義信賞(新人賞)「藤田美術館」 撮影:伊藤彰[アイフォト]

総務委員会

設立記念総会・AACA賞表彰式

12月11日、第36回設立記念総会・AACA賞表彰式が開催されました。

第1部の設立記念総会は、東條会長のご挨拶から始まりました。挨拶の冒頭では、日本建築美術工芸協会の2025年1月発行の会報が100号を迎える事に触れられました。創刊号に掲載された初代会長の芦原義信氏のコメントを紹介し、協会の目指す方向性について改めて語られました。

また、2022年に群馬県で制定された「群馬パーセントフォーアート」推進条例や他の数多くの自治体においても国の「文化芸術推進基本計画」に準じた施策の元に様々な条例が制定され文化芸術に対する施策が進んでいる事に言及され、aacaでは「パーセントフォーアート」の取り組みを鋭意進めて行きたいとの考えを述べられました。

次に和出専務理事より会勢報告がありました。主に今年度12月までに実施された各委員会の活動状況が紹介され、今後も協会活動への積極的な参加をお願いされました。

第2部のAACA賞表彰式では全受賞作品の紹介動画が上映され、各受賞作品の詳細を鑑賞することができました。その後の古谷誠章AACA賞選考委員長の講評では、上位賞に関する審査ポイントと共に、建築の中にある美術・工芸的な要素をどうとらえるのか、といった貴重な話も伺えました。講評後の表彰式では各受賞者・入選者へ東條会長から賞状が贈られました。

最後にAACA賞受賞者の有限会社安田アトリエの安田幸一様より受賞のご挨拶が述べられ、設立記念総会並びにAACA賞授賞式が終了しました。

(委員長 小谷純造)

AACA賞2024 受賞作品・受賞者**・AACA賞**

「ポーラ青山ビルディング/
土浦亀城邸 復原・移築」
建築、設計・監理:有限会社安田アトリエ
安田幸一 北田明裕 鈴木智子/建築、設計・監理:株式会社久米設計 安東直 星吉秀 鎌田裕樹 宮崎将行/アート監修:株式会社TAKプロパティ 村井久美

・芦原義信賞(新人賞)

「藤田美術館」
大成建設株式会社 松村正人 平井浩之/
関西支店 宮本育美

・優秀賞

「ROOFLAG」
MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO
原田真宏 原田麻魚

「MUGF PARK / LIBRARY」
株式会社三菱地所設計 谷澤淳一 大森晃 長谷川結以/東北支店 高橋祐太

「花重リノベーション」
有限会社マル・アーキテクチャ 高野洋平 森田祥子

・奨励賞

「古平町複合施設 かなえーる」
大成建設一級建築士事務所 高橋章夫 杉野宏樹

「十津川村災害対策本部拠点施設」
RFA 藤村龍至

「Ginza Genuine Glass Garment」
ETHNOS 櫻井建人

「小諸蒸留所」
SOGO 建築設計 十河彰 十河麻美

・美術工芸賞

「ジズホールディングス東京本社」
高濱史子 小松智彦

・特別賞

「虎ノ門ヒルズステーションタワー」
森ビル株式会社一級建築士事務所 新井章邦 田尾健二郎 荻野隆博 雨田祥吾 森村祐子 田尾若菜/株式会社久米設計 安東直 鈴木章浩 早瀬幸彦 横田順

・入選

「五島市立図書館」
株式会社梓設計 永池雅人/九州支店 伊地知寛 石川友樹

「鎌倉アパートメント」
miCo. 今村水紀 河合伸昂 篠原勲

「YGD/越後葉草蒸留所」
株式会社EA 東海林健/嶋田貴之建築設計事務所 嶋田貴之

「温故創新の森 NOVARE」
清水建設株式会社 牧住敏幸 小林央和 小川浩平 稲葉秀行 金馬貴之

「睫々居」
中川雄輔/株式会社木々のや 奥村英史 奥村悠視

「3rd MINAMI AOYAMA」
株式会社三菱地所設計 梶隆之 本田輝明 芥隆之介

「洗足学園音楽大学
メディアラボラトリー」
鹿島建設株式会社 天野裕正/KAJIMA DESIGN 竹本正之 平馬竜

※部署名・肩書省略



AACA賞受賞者・入選者と選考委員

第206回aacaフォーラム 「まちライブラリー」の取り組みと、その一例 「MUFU PARK / LIBRARY」

開催日:2024年8月8日
引率者:磯井純充さん、三菱地所設計 設計担当者
(大森さん、高橋さん、長谷川さん)
視察地:MUFU PARK / LIBRARY
(東京・西東京市)

フォーラム委員会

次世代を担う子どもたちの「体験格差」や書店の急速な減少が社会的課題として顕著になってきており、私たちはその解決を意識する必要に迫られています。第206回aacaフォーラムでは、「まちライブラリー」の取組みに注目しました。「まちライブラリー」の取組みを実践する場のひとつである「MUFU PARK / LIBRARY」(ACA賞2024・優秀賞)を会場とし、「まちライブラリー」の提唱者の磯井純充さんにその取組みをご説明いただき、その実践の場として形づくられた「MUFU PARK / LIBRARY」を設計・監理者の三菱地所設計担当者に案内していただきました。



説明風景



熱弁する磯井さん

「まちライブラリー」は、個人や団体が家や店、病院などの一角に本棚を設置し、本を持ち寄り交換し、「本」を通じてコミュニティを作っていこうという活動です。

従来の図書館の主目的は「本の収蔵

と貸し出し」ですが、まちライブラリーは「本を媒介にした人と人の対話」を重視しています。例えば、誰かが寄贈した本には、その本に関する「みんなの感想カード」が添えられています。本の感想や寄贈した理由が共有されることで、その本は他の利用者にとって、単なる情報源ではなく個人の体験や思いが詰まった特別なものとなります。読書体験に個人のストーリー性を加え、地域住民同士のつながりを深めるユニークな仕組みです。

まちライブラリーは「本を通じて地域の文化や歴史を共有する場」の役割も果たしています。例えば、その地域にゆかりのある作家の本や、地域特有のテーマに関する本が集まることで、住民が地元の魅力を再発見する機会を提供しています。このような文化的価値の創造は、都市部だけでなく地方においても重要な意味を持ちます。

磯井さんは、「まちライブラリー」の活動のテーマとして、「顔の見える関係を取り戻す」「個人でどこまでできるかを追求する」の二つを挙げられました。「豊かなコミュニティは官に頼らない小さな規模の学び合い(学縁)から醸成される」という実践に裏付けられたお話には説得力がありました。「公は官の意味で捉えられるが、パブリックはPEOPLEのものという意味なのだ」という捉え方は、豊かな文化的環境を日本に創造していくために大切な視座となり得ます。

磯井さんには「個人的な活動こそが社会的な活動につながる」という想いがあるとのこと。「資本の論理=組織の論理」が優先され「個の視点が看過」されている現代社会を批判的に捉え、「個」あるいは「小さい集団」の活動の積み重ねを大切に「まちライブラリー」を盛り上げてきた磯井さん。「大切なのは寛容性である」という優しさは、長年試行錯誤を深められたこそその眼差しと言えるでしょう。

情報通信と交通手段の発展により世界は近くなったものの、ネット空間に閉じ込められ、むしろ「個」に分断されてしまった現代。そんな今だからこそ、改めて、磯井さんが提唱する「『個』から始まるコミュニケーション」の在り方の模索が重要になっていることが、熱量のある語り口からひしひしと伝わりました。

本を媒介とした子どもたちの未来づくりや地域活性化の取組みを知る今回のフォーラムは、参加者の皆さんにとって未来への橋渡しのために何が必要かを自分ごと化として考える良い契機となりました。

※「まちライブラリー」の詳細を知りたい方は、磯井さんの著書『まちライブラリー』の研究-「個」が主役になれる社会的資本づくりをご覧ください。

(委員長 萩尾昌則)



MUFU PARK / LIBRARYの説明の様子



MUFU PARK / LIBRARY全景

第207回aacaフォーラム 地域の力を集めた市民芸術祭 「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」の取組み

開催日:2024年10月20日
引率者:福島 治さん
視察地:江東区古石場文化センター、
アートパラ深川現地会場

フォーラム委員会

「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」は、東京・深川という舞台でアートを街に解放する「地域の力を集めた市民芸術祭」です。今回は、このイベントの提唱者である一般社団法人アートパラ深川理事で東京工芸大学デザイン学科名誉教授の福島治さんに「アートパラ深川」の活動をご紹介いただき、レクチャー後は、門前仲町を散策しながら今年度の芸術祭の様子を体感する一日となりました。



深川の街なかに溢れる「街なかアート」たち

「アートパラ深川」は、何らかの障がいを持つ方々から生み出されたアートが江東区の門前仲町、清澄白河、森下、豊洲に溢れる、深川の街なか全体が美術館になるイベントです。神社仏閣巡りとアート鑑賞が合体した御利益のある街歩きなどにより、偶然の出会いをつくり出します。アートは私たちの心を掴み、人々に「対話」を生みだします。誰もが互いを認め合い支え合う「共に生きる」社会を「アートパラ深川」は目指しているのです。

オリンピック憲章では、スポーツだけでなく、その開催都市の文化・芸術も活性化させレガシーとして残すことが定められています。以前はオリンピックとパラリンピックは別々の主催団体が同じ場所で開催するという形態でしたが、2021年に開催された東京2020は初めてオリパラをひとつの大会として開催。それ故に、障がい者のスポーツだけでなく、障がい者の文化・芸術も活性化させレガシーをつくるのが求められました。オリパラ準備

委員会でも活動していた福島さんは、そこでの準備に限界を感じ、市民芸術祭を興すことに切り替えて「障がい者の文化・芸術の活性化とレガシー化」企画を形にし始めたそうです。著名な芸術祭は数億円程度の税金が投入されて開催されているそうですが、市民芸術祭「アートパラ深川」は公的資金に頼らずに毎年資金ゼロから立ち上げ、実施しています。

「『美術』という言葉が誤解を与えている」と福島さん。「『美しい』ことのみがアートではない。『常識からはみ出す』ことが『今までの自分の想像を超える感動』を生み出す。『はみ出す』ことを一緒に楽しみ寄り添い個性を理解することが『共に生きる』には大切」と語られました。

知的障害のある方は特別支援学校を卒業すると、多くの方は就労支援b型の事業所で働くことになるのが一般的。そこでは1カ月の平均給与は1万6千円で、障害の程度に合わせた障害年金を合わせても1カ月10万円には届かないそうです。そのような方が今日本には約30万人程度いらっしゃり、事実上、自立することが出来ない就労環境であることが福島さんの問題意識です。日本国憲法第25条第1項「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」が今の日本では実現されていない現実を福島さんが丁寧に紐解きます。

施設内の会場展示の場では、鑑賞者は良いと思う作品に「いいね」シールを貼り、退場時に自分が評価したアートのポストカードが貰え、3会場全て回ると11枚のアートポストカードが無料で手に入ります。これは、帰宅後に家族に「こんな素晴らしい作品があった」と話題にすることで障がい者へのイメージがポジティブになることを狙ったものとのこと。コンペ受賞者のアーティストは、翌年にミニ個展開催があり、障がい者と社会の接点

が拡大していきます。ミニ個展では希望者にアートの販売も行い、売上は全てアーティストの収入となります。芸術祭の期間中には、障がい者と健常者が一緒になって楽しむイベントも行い、「共に生きる」ための共感の場が生まれます。「絵を1枚売ったら終わり」にならないように2次利用の仕組みも構築。対話型アート鑑賞会など、様々な可能性を模索し、働き方のひとつがアートである、という環境をつくるべく試行錯誤を続けています。

「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」は、社会に新しい価値をもたらす取り組みであり、社会全体が障がい者を含む全ての人々にとって生きやすい場となる未来への道標です。その活動が、他の地域や分野にも影響を与え、日本全体で「誰もが共に生きる社会」の実現に寄与することを願っています。

※[アートパラ深川おしゃべりな芸術祭]憲章
<https://artpara-fukagawa.tokyo/charter/>
(委員長 萩尾昌則)



富岡八幡宮の「みんなのアート絵馬神輿」視察



障がい者作家による富岡八幡宮の巨大絵馬と共に

会員交流委員会

新潟県の近代建築全箇所を貸切バスで巡る旅。約40名の参加者は、アートや建築の幅広い分野で活躍する方々で、建築視察と異業種交流が同時に叶う、楽しく実りある2日間を過ごしました。

越後松之山「学校の森」キョロロ(手塚貴晴+手塚由比/手塚建築研究所)

バスから降りると里山に溶け込みながらも、存在感を放つ赤い蛇のような建築が見えてきた。「ニョロロじゃないの?」とネーミングにクスッとしながら近づいてみる。ここは、里山の自然を学ぶための体験型の博物館。「赤い」理由はコールテン鋼。約160mにもなる長く背の低い建築が「蛇」に見えるのは、地形に合わせてつくられた建築のカタチ。雪深いこの地で、2000トンの重荷に耐えられるという。錆びれば錆びるほど強くなる造船の技術を利用した構造で、錆が建物を守っている。夏と冬では表面の温度差が80℃もあり、建物が20cmも伸び縮みするそう。「時には寒暖差により、パキーンと大きな音を立てて動くんです」と職員の方が語ってくれた。となりの「美人林」ではその名のとおり、すらっと色っぽく幹をくねらせたブナの木たちが出迎えてくれた。雪の重みで木の下の方が横向きになってしまうものの、その荷重に耐え光を求めて上に伸びることで、写真のようなうっとりする景色が広がる。



美人林

越後妻有文化ホール・十日町中央公民館「段十ろう」(梓設計)

「だんだんどうも」は「お世話になっています、こんにちは」の意味がある新潟県の方言、と教えてくれたのは市の職員の方。才能の卵がだんだんに成長してスターとなってここに帰ってきてほしい、という意味も込められた中央公民館「段十ろう」。708席あるホールと公民館が一体となり、人々がここで出会い、交流を広げ、活動が発展するように、また災害時には市民を守ることを想定した十日町市の想いが詰まった建築で、その表情はアクティブでありながらどこか優しい。正面には新潟県産の杉を使用した100mにも及ぶ天井ルーバーから建物内のアクティビティが感じられる門型の「雁木ギャラリー」があり、イベント時には十日町の着物をモチーフにした光のインスタレーション「光り織」がルーバーを光の線へと変化させ、華やかに来場者を出迎える。

福祉型障害児入所施設まごころ園(山下秀之/一級建築士事務所山下研究室、長建設事務所)

子供たちが育つ施設とは。それは家庭に近いカタチと雰囲気作りであると話すのは、当施設の設計を山下研究室に依頼した当時の学園長。従来の施設ではそれが叶わないと感じ、知的障がい者施設を手がけたことのない建築家に依頼したという。山下秀之氏も「オリジナルを生み出すために、他の施設は見に行かないと決めていた」と語ってくれた。従来の施設は直線的で廊下の両サイドに子供たちの部屋が並ぶ硬くのっぺりとした印象だが、ここは違う。中庭を囲って回遊できる円環のひだ状の木質空間で、一部屋一部屋が独立したコテージのような雰囲気。施設の中をいながら、まちなかの路地を巡るように、行き先が見え隠れする。誰かと出会ったり、一人になったり、それぞれが思いのままに空間を楽し

むことができそうだ。

りゅーとびあ新潟市民芸術文化会館(長谷川逸子/建築計画工房)/新潟県民会館(佐藤武夫設計事務所)

「日が落ちる前に屋上庭園を周回してください」と案内してくれたのは運営管理者の石川さん。夕陽が落ちるその瞬間に柔らかく心地よい風を感じながら、信濃川の眺望を楽しんだ。コンサートホール、劇場、能楽堂を有する卵型の文化会館「りゅーとびあ」は、佐藤武夫による新潟県民会館や、隣接する新潟市音楽文化会館、新潟市体育館、新潟市陸上競技場の中心に計画された。最後に完成したこの「りゅーとびあ」と周辺施設や6つの空中庭園が、緩やかなスロープによって優しく手を取り合うように繋がっている。文化会館から県民会館への道中も木々が穏やかにライトアップされていて、移り変わる季節を楽しむことができた。

えびず

建築視察ではないが、本ツアーのメインイベントだったかもしれない。既に視察中に顔見知りにはなっているものの、名刺交換をしていない方が多く、ほんの少し緊張しながら着席。それにしても、出てくるお料理がなんともインパクトが強く、楽しい。お酒と一緒に緊張感も飲み干せた(笑)。最後に出てきたのはパンケーキ。期待を上回る面白さに、初対面の方々とともにたくさん笑い、楽しく交流することができた。

新発田市民文化会館・公民館/落谷虹児記念館(内井昭蔵建築設計事務所)

ホールの丸みがあるまま建築の表情となっているコンクリート打ち放しの文化会館と、青緑の屋根がかかる塔が印象的な「落谷虹児記念館」。教会風のいかにも内井先生らしき溢れる建築だった。隣の文化会館とは異なる作風で変化を楽

しませてくれる。窓も屋根もドアも、細部まで装飾にこだわった痕跡が残る。内井先生はお祖父様が設計した「函館ハリストス正教会」について「私は、いつかどこかでこのような建物をつくってみたいと考えておりました」と述べており、それがこの「落谷虹児記念館」だそう(東西アスファルト事業協同組合講演会「建築と装飾」より)。

カトリック新発田教会(アントニン・レーモンド)

新発田市民文化会館の設計中に内井昭蔵先生がこの教会を訪れて「しばらく涙が止まらなかった」という話を聞いたことがあり、今回見学できることを大変楽しみにしていた。小さくて温もりに溢れた教会。赤煉瓦を特徴的に積み上げた壁に、八角形の木造屋根。見上げると複雑さが美しい丸太から目が離せなくなる。窓に貼られた和紙の装飾パターンは、ノエミ・レーモンドによるもので、そこから入る光が赤煉瓦に美しい表情をつけている。



新発田教会の和紙の装飾パターン



和紙の装飾を通して入る陽の光

自然素材で構成された空間で陽の光に包まれ、その優しい温もりに心が安らぐ感覚をたっぷり味わった。

蔵春閣-大倉喜八郎別邸(移築復原設計・施工 大成建設)

ここは大倉喜八郎が1912年に東京向島別邸内に建設した迎賓館。100年にも及ぶ歴史の中で、複数回にわたる所有者の変更や、船橋市に移築され飲食店に用途変更した経緯があるものの、内外装や部材、美術品までもが残されていたという。2023年に喜八郎生誕の地である新発田市に移築された。関東から雪深いこの地に解体・保管していた当時の部材を生かして移築したということは、文化的価値を残すための意匠性の保存を考えただけでもその難解さが想像できる。大成建設が最新の技術を用いて、100年以上前の建築を見事に移築・復原し、地域のシンボルとして蘇らせた。設計者による熱心な説明を聞きながら、貴重な襖絵や装飾された建具、鳳凰模様が描かれた天井、保存されたシャンデリアを眺め、ところどころ目立たないように施された耐震補強の施工箇所を見つけることを楽しんだ。

玉翠園・谷村美術館(村野藤吾)

谷村美術館は村野藤吾の最後の作品とも言われている。石の洞窟のようなこの建築は「シルクロード砂漠の遺跡に見立ててつくられた」そう。自然光と照明が織りなす絶妙な光と影が、主役である仏像の存在を際立たせている。彫刻家の澤田政廣の作品を展示するための建築である。限られた時間の中で、2回順路を巡ってみ

た。わずかな時間の経過で光の入り方や影の落ち方が異なり、仏像の表情も異なって見えるのが不思議だった。玉翠園は、窓越しに見る庭園そのものの景色が美術品のよう。遠くに見える山々を借景にしているため、実際の広さよりも奥行きを感じ、広大に見えた。

小林古径記念美術館・小林古径邸(宮本忠長建築設計事務所)

吉田五十八の初期の数寄屋建築と言われている小林古径邸は元々1934年に東京・大森に建てられ、2001年に古径の故郷である上越市に移築・復原された。座ってみるとちょうどいい高さになるよう、緻密に計算されている雪見障子、限りなく細いその障子の棧、面取りして極限まで細くしている柱やその収まりなど、職人技がそこかしこに光る、繊細で優美な建築だった。日本画家の古径が「私が好きになるような家をつくってほしい」と吉田に頼んだという。小林古径美術館は古径邸の移築プロジェクトをきっかけに上越市に集積してきた古径の作品コレクションを収めるために計画され、宮本忠長建築設計事務所が高田城址公園内に一体的に整備してきた。「風土に根ざす」ということを宮本忠長氏から受け継いだ同事務所が、地方における建築家の役割とその重要性を示したプロジェクトとなっている。

(建築画報社 櫻井ちるど[法人会員])



谷村美術館にて

第14回aacaサロン 漆に魅かれて

会員増強委員会

第14回目となる今回のサロンは漆工芸家の齋藤卯乃さんと漆装飾研究者の齋藤潮美さんのお二人より「漆」の採り方から未来への展望まで様々な話を伺った。会場は箱根ガラスの森美術館やポーラ美術館にも近い仙石原にある齋藤漆工芸の小塚山展示室。アトリエも徒歩2-3分の場所にある、木々に囲まれた清閑な環境で開催された。紅葉も終盤ではあったが箱根一帯は観光客も多く、現地に來られた方々は一苦勞であったろう。

漆と言えば「器」をイメージする方が多い中、今回のサロンを通して印象がだいぶ変わったのではないだろうか。スライドでの作品や研究内容に加え、漆の採り方、下地、塗り、磨き等々漆の作品を創る工程を動画も用いて細かに説明頂いた。卯乃さんからはご自身の作品のコンセプトや色、質感、塗りなどについて丁寧に説明頂き、併せて寺社仏閣の彩色や陶器の漆の塗りなども紹介頂いた。潮美さんからはベトナム・フエにあるグエン朝王宮の修復を中心に説明頂き、建築や彫刻との結びつきや近代のベトナム漆工技術は日本や中国、フランスの影響を受けたことも初めて知ることになった。研究だけではなく鉄木(てつぼく)に漆の塗りの工程を記し伝承しようとされている事には敬意を表したい。

卯乃さんの漆作品の工程は完成までに非常に多くの時間を要する。根気と作品に対する執念を感じずにはいられない。それにより完成した作品は、観る人、観る方向、ほんの僅かな光によって陰影も変わり、印象も七変化する。果たして今見ている印象は作家の思惑なのか狙いなのか、けれど面白い。また、質感、質量、仕上げは「彫刻」と言っても過言ではない。いや、むしろ彫刻と言った方が潔い。ご覧いただいていない方は「百聞は一見

に如かず」である。

漆の素地には木・紙・竹・陶・金属・皮・布があるが、作品は布を用いた素地による乾漆がほとんどである。発泡スチロールなどで原型を創り、漆で布を貼り重ねていって乾燥してから中の原型を取り去る。これが彫刻のような量感を生み出すゆえんであろう。また、面と面が変わる稜線の仕上げ方が肝のようで、その仕上げは見事である。紙を素地とした紙胎による和紙による作品も見せて頂いたが全く別の作品であり同じ作家の作品には見えない。兎に角、作り方でも七変化する「漆」、とても興味を惹かれ魅せられる素材である。

早稲田大学中川武名誉教授に師事され研究院客員准教授である潮美さんは漆装飾研究者。と言っても当協会のBOX展では作品を出展し佳作入賞している。漆の研究やベトナム・フエの歴史的建造物群の漆・彩色装飾技術の研究に留まらず、実際に保存修復に携わり、ベトナムにおける技能・技術・知識の教育や未来に向けた継承も併せて考えているところに「漆」の未来を感じられる。表現者としての卯乃さん、研究者としての潮美さん、姉妹が「漆」に関わり歴史・文化を紡ごうとしていること自体が他に類を見ない。これからも「漆」の歴史・文化を継承すると共に新しい「漆」を見出してほしいと心から願う。

サロンにはお二人の恩師の中川先生もご出席され内容が濃いものになった。感謝申し上げる。サロンでの話は尽きず、次の機会では御三方によるトークがあれば盛況間違いなしと思う。

最後に一点だけ、是非、漆作品の外部展示手法と建築・都市・ランドスケープとのコラボレーションも考えてほしい。

(三菱地所設計 山極裕史)

開催日:2024年11月27日

話し手:漆工芸家 齋藤卯乃さん

漆装飾研究者 齋藤潮美さん

モデレーター:三菱地所設計 山極裕史

会場:齋藤漆工芸 小塚山展示室



展示スペース全景 左上は潮美さんの研究展示



サロン風景 奥は展示室



サロン風景 話し手は中川先生



卯乃さんによる作品説明



潮美さんによる研究説明

展示台左手前が鉄木の漆工程見本手板

AACA賞って?

会員H & 会員K & 会員T

H: ついに会報100号~!!

K: 会報が97号からリニューアルされたのは、aacaを見直すりデザイン方針によるものだったのよね。年末には会員アンケートも実施されたし、aacaが変わろうとし始めてる感じがするね。

T: この流れを機に色々見つめ直すことは大切だね。aacaの今までとこれから、とかね。

H: で、AACA賞の話なんだけど。

K: というと?

H: AACA賞は「aacaの設立理念と目的に叶い、建築、美術、工芸、ランドスケープなど、様々な分野が協力し、融合して創造された文化的環境と美しい芸術的景観を対象とする協会賞」とされているよね。でも、色んなところで、「受賞作が建築単体に偏り、多分野の共創という理念が薄れているんじゃないか」っていう声を聞くんだよね。

T: 確かに。昔はパブリックアートが受賞したこともあったけど、最近の受賞を見ると「THE 建築」の傾向が強い感じ。

K: そもそも、本号P19に掲載されている芦原義信さんの文章を読むと、「素晴らしい空間」と言いながらも、「本格的な建築の誕生を望む」ってなってる。

T: 芦原さんは建築の方に目が行ってたのかな? でも、憲章には「健康で文化的な空間の創造」って書いてあるよね。

H: AACA賞の対象分野はというと……「都市デザイン、地域デザイン、ランドスケープデザイン、パブリックデザイン、建築、工芸、絵画、彫刻、環境美術、グラフィックデザイン、ディスプレイデザイン、インテリアデザイン等のほか、素材やエネルギーの領域に至るまで」ってなってる。建築に限ってないし、広範囲だね。

K: かつてパブリックアートは受賞したけど、最近は応募がないだけなのかなあ。

H: aacaは、専門分野に従事する人が集まる他団体とは異なり、多様な分野の人の集まりで利権団体でもない点が

とてもユニーク。その点を活かすためにも「AACA賞の在り方」をしっかり議論して欲しいなあ。

K: ちなみに、AACA賞の公開審査とか、表彰式は行った?

H: あ、それぞれ! AACA賞の素晴らしいところは公開審査であるところ! 密室での議論ではなく、衆人の前で議論するのは、透明性があり素晴らしいよね。

T: しかも表彰式の時、会場の外に、1次審査に通らなかった全応募作品のパネルが展示されてた。あれもイイ!

K: 他の建築賞を受賞している作品が選外になっていたりして、驚いた。あのパネルを見て初めて、やっぱりAACA賞は「THE 建築」賞とは一線を画してるのかも、と思うようになったわ。

H: 一次選考での選定議論も公開してくれると参考になるんじゃない?

T: AACA賞は「様々な分野協力・融合」「文化的環境」「美しい芸術的景観」がキーになるはずなんだけど、受賞ポイントがイマイチ分かりにくいんだよね。

K: 表彰式で、古谷委員長が、「様々な分野が融合するといっても、アッセンブルしてつくられたものが良いということではなく、人の手の跡、手仕事の痕跡が大事。背景にある情熱・息遣いを追体験できることも大事なポイント」と言っていたのが印象的だった。

T: 今回は資源循環の考え方が評価された作品もあったよね。あれは、対象分野だとエネルギーの領域になるのかな?

K: 公開審査では「建築そのものがアート」という発言もあったわね。

H: でも、公開審査に参加した体感では、やはり「建築の完成度」に注視した「THE 建築」の賞の傾向を感じたなあ。

T: 個人的には、建築としての完成度だけでなく、美術や工芸やランドスケープなどの異分野がどれだけプロジェクトの核心に関わっているかを明確に評価して欲しいと思う。

H: 公開審査では、どの分野がどう共創したことを評価するのか、について、審査委員に明確にコメントしてもらうことが必要な気がする。

K: プロジェクトのプロセス自体を評価する仕組みも必要じゃないかしら。建築家、美術家、工芸家がどのように協働したのか、その過程を公開し評価することで、共創のモデルが次世代に伝わるんじゃないかなあ。

T: 建築家だけでなく、参加した美術家や工芸家も平等に表彰される仕組みも有効じゃない? 建築家だけが脚光を浴びるのではなく、施主を含め関係者全員が主役となる形が理想だと思う。

K: あと、特別賞って名称おかしくない? 公開審査を見てたら、単に、AACA賞、優秀賞、奨励賞に続く、入選の一つ上の賞だった。特別賞って奨励賞より格上な響きがあるから、奨励賞受賞者が可愛そう。誤解を招くから、名称は考えてあげた方がいいよね。

H: そういう点も含めて、審査評では、どこがaaca的なのか、ということをしっかり示して欲しいね。

T: そうだね。いずれにしても、AACA賞は他の建築賞とは違うことが明確になると、ますます面白くなってくるよね。楽しみ!!

H: 会報100号はaacaにとっては一里塚。10年ひと昔どころか、1年前のことすら記憶の彼方の激動の時代では、記録することと考えることが大切だね。

K: 今年は昭和100年、戦後80年などの世界の節目。aacaの来し方行く末をしっかり見つめたいわね。



第1回AACA賞受賞作品
「東京都多摩動物公園昆虫生態園昆虫ホール」

私が思うaaca的空間

宮越家離れ・庭園

長谷川亨 建築家[個人会員]



宮越家は、青森県の津軽半島中央部に位置する中泊町、人口11,000人の町に佇む。

9代当主正治氏は、1920(大正9)年、夫人のために瀟洒な離れ「詩夢庵(しむあん)」と津軽地方の作庭様式・大石武学流庭園「静川園(せいせんえん)」を完成させた。

「詩夢庵」は、天井や壁、縁側や床の間に銘木や選びぬかれた建材を使用、丁寧な仕上げが施されている。

建具の襖絵は狩野山楽・岩佐又兵衛・狩野常信といった安土桃山～江戸前期に活躍した絵師の作と伝えられている。なかでも3カ所の窓は、狩野派の巨匠・橋本雅邦に学んだ日本画の素養とアメリカ留学で身に付けたガラス技法で、我が国のステンドグラスの基礎を築いた小川三知(さんち)の作品である。

当時のデザイン潮流を意識しながらも「和」の意匠を巧みに織込み、技巧的なガラス技術の粋が織り込まれている。

「涼み座敷の間」を飾るガラス障子の作品は、4枚に配された花木によって早春・初夏・初秋、余白を初冬に見たてて季節

の移ろいを表すとともに、背後の庭木を借景としている。

「静川園」の池泉は、滝石組や中島、石橋などで構成され、各種の石造文化財は、越前地方をはじめ各地から運ばれ、日本画家・橋本関雪が京都東山に造成した国名勝「白沙村莊庭園」の影響がうかがわれる。

草木芽吹く初春、新緑滴る盛夏、草花燃ゆる錦秋、水墨画のような厳冬、四季折々の景観を見せる宮越家離れ・庭園は、建築の中に美術・工芸・造園などの造形作品を取り入れ、人間性豊かな環境づくりをするaacaの理念にふさわしい空間と確信する。



涼み座敷の間 写真提供:中泊町博物館

佐川美術館・樂吉左衛門館 茶室

山崎輝子 皮革工芸家[個人会員]



「私が思うaaca的空間」を、というこの度の原稿依頼で「はてさて!」と思いました。素材を表現の手段としている私の様な皮革工芸家にとって、どういう視点から景観や空間を選択したら良いか、と。考えあぐねている内に、この際自分の作品を置きたい空間と場所は何処か?という視点で選んでみようと思いに到りました。そして思い浮かんだのが滋賀の佐川美術館・樂吉左衛門館併設の茶室です。

数年前のaaca建物視察会に参加した折、2007年のAACAA賞を受賞した佐川美術館に行きました。エントランスの水と光に誘われ美術館内に入り企画展を鑑賞したのちに、数人ずつに分かれてドキドキしながら樂吉左衛門館へ移動。その地下の薄暗い茶室の入口、わずかな光に浮かび上がる寄木の様な「路」に導かれて行くと、大きな一枚板のテーブルと椅子の「寄付(よりつき)」にたどり着きます。そこから「水露地」を行くと、突き当たりに半円の空がポツカリと目に入ります。その先の「中潜」を抜け、細い光に照らされた「埋蹲(うめつくばい)」を横に、

和紙に囲まれた様な佇まいの小間「盤陀庵」があり、そしてハシゴの様な階段を登ると地上の広間「俯仰軒」に出ます。

特に「俯仰軒」は圧巻でした。大きな軒の先に葦の茂みが眼に映り、広縁はアフリカから運ばれた大きな敷石で埋め尽くされ、その先には琵琶湖の水面が広がって見えます。水と光そして風、それはまさに水面に浮かぶ茶室でした。

この、15代樂吉左衛門の「守破離の精神」に溢れた茶道のしつらえに魅了された贅沢な旅だけではなく、aacaに入会して20数年、多種多様な空間に出会う機会に恵まれました。再び「はてさて」私の作品と会話をしてくれる空間は何処にあるのだろうか?と、出会いと縁に期待している昨今です。



茶室広間「俯仰軒」 撮影:畠山崇

『aaca』創刊号に掲載された、初代会長・芦原義信氏の文章を、あらためて、100号記念号で紹介させていただきます。

創刊にあたって

この度、日本建築美術工芸協会の会報が発刊されます。この協会は、建築家や、美術家、工芸家が協力して、わが国が世界の文化大国となるため頑張ろうということではじまったものなのです。先日、東京サレジオ学園が、村野藤吾先生と吉田五十八先生を記念する村野賞、吉田賞を夫々受賞されました。これはほんとに機宜に適した受賞であったと私自身も大変うれしく思っています。

というのは、この建築が建築主のみならず多くの関連芸術家の努力でできあがっているということです。先般アメリカから来た友人の建築家が、アメリカではポスト・モダンはまだ終わったというのでした。私自身も最近の建築雑誌を見る度になんとなくそんな予感がしないのでもなかったのですが、それでは次の方向はどうかかと思いついてあぐんでる時、このサレジオ学園の建築を見て、はっと思い当たったような気がしました。これは、ポスト・モダンの建築のようにわざわざ正面を飾ったり、不思議な飾りをつけたり、斜交面をとったりするものではなく、あくまで近代建築の正統派として建築家、彫刻家、家具設計家、ガラス工芸家、テキスタイルデザイナー等が協力して構成した素晴らしい空間なのです。これこそ、わが建築美術工芸協会のほこりとすべき建築であると信ずる次第なのです。これからも、このような本格的な建築が誕生することを心より望むものがあります。

aaca | 2025.01 | no.100

発行日:
2025年1月27日
発行:
一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20 建築会館6F
TEL 03-3457-7998
FAX 03-3457-1598
URL <http://www.aacajp.com>
E-Mail info@aacajp.com
編集:
広報委員会
委員長・編集長 勝山里美
副委員長 中村弘子
委員 金原京子 齋藤潮美 竹生田正
津下庄一 望月純子 森田高年
山崎和子
表紙・フォーマットデザイン:
矢萩喜從郎

表紙に向き合うと

修道院の廃墟は、我々を遠い過去へ誘う力がある。19世紀後半にギユスターヴ・エッフェルのフランス系ポルトガル人の弟子、ラウル・メスニエル・デ・ボンサルドに依ってリスボンに設計された45メートルもの高さがある鉄製のサンタ・ジュスタのリフトに乗って高台に辿り着くと……。1755年のリスボン大地震で崩壊したカルモ修道院が現れて、そこにフラッと立ち寄ってみると、強烈な衝撃を受けた。この衝撃は前にイタリアで経験したことと同じだと思った。小さなお城を改造したホテルで朝食を摂っていた時に、貼ってあったチラシで、アンドレイ・タルコフスキーの映画〈ノスタルジア〉(1983年)の舞台になった、イタリアのトスカナ地方にあるサン・ガッガーノ修道院の廃墟の写真が目に入った。予定になかったが、これは見に行かねばと思ったのだった。13世紀、ゴシック様式のカトリック教会だったシトー派の修道院は、屋根が抜け落ち、両側の壁で遮られた青空と、最上部が三角形をした正面の壁の、おそらくバラ窓だったのではないかと思われる円から漏れる青空が、実に印象的だった。何故なのだろう。以前あった屋根が抜け落ち、廃墟として残されている情景を観た者は、廃墟になっていない修道院より、余計、神聖な気持ちが増し、存在の意味をより考えさせてくれる気がする……。装飾も全く無くなった四方の壁の中に閉じ込められ、切り取られた空しか見られない状況だからこそ、より想像が掻き立てられ、荘厳さを感じられたと言うことなのだろうか。(矢萩喜從郎)



輝く瞳の先にあるもの。

何か大きなものができる。

何か新しいものができる。

何か素敵なものができる。

そんなワクワクを

私たちは、いつも、いつまでも

忘れないようにしたいと思う。

子どもたちに誇れるしごとを。

SHIMIZU CORPORATION
清水建設

Panasonic

親機
不要で

明るさも色も自由自在

調光信号線と親器が不要で らくらく施工

シンプルな施工で短工期・省施工を実現。
事前の回路設計もなく省設計です。



タブレットのボタン一つで かんたん設定

従来の無線システムと比べて設定時間が
約1/2に短縮可能です。*

※マッピングなしで50台程度の場合

■当社従来商品との設定作業時間比較



照明器具一台単位で 明るさや色味の調整が可能

かんたんな操作で「省エネ」かつ
「快適」な空間づくりをサポートします。



新無線照明制御システム

LiBecoM
リベコム

NEW
2024年11月発売
リベコム
WEBサイトはこちら





TOKYO TORCH Torch Tower

 三菱地所設計
Mitsubishi Jisho Design

www.mjd.co.jp



地図に残る仕事。®



大成建設グループ

大成建設 大成ロテック 大成有楽不動産 ピーエス・コンストラクション 大成ユーレック
大成設備 成和リニューアルワークス 大成有楽不動産販売 大成建設ハウジング 佐藤秀 他



